

=====  
東京クモゼミ報告 第 250 号 加藤家 2017 年 1 月 7 日  
=====

参加者 池田博明, 加藤輝代子, 加藤むつみ, 谷川明男, 平松毅久

+++++

平松毅久, 2017. 身近なクモ・南のクモの話題。平松報告。(1) ヨコヅナサシガメ終齢(5 齢)幼虫がジヨロウグモ卵囊内の卵を吸汁(きどばんクモ画像による, 2009 年 11 月記録)。ギンメッキゴミグモ卵からの吸汁を観察した。(2) メガネドヨウグモ幼体の網で心棒に沿わせた網を観察した。(3) リュウキュウミドリヒメグモの網はムネグロヒメグモ型の全粘球性の網だった。

[コメント] ヨコヅナサシガメは 1930 年代に中国から侵入した(平松)。

+++++

鶴崎展巨・山根一眞, 2016. 奇跡の発見 鳥取市雨滝で見つかった鳥取県初記録となるオオナミザトウムシ 鳥取県生物学会研究発表(2016/12/08 鳥取県立博物館)。池田報告。

山根一眞氏(獨協大学)提供の pdf にて説明した。山根は鳥取大学の鶴崎教授を訪問した後, 11 月 18 日, 鳥取県東部の雨滝を訪れ, 採集したザトウムシ 2 種の写真を鶴崎教授に送った。それを見た鶴崎教授は仰天した。1 種はそれまで兵庫県が分布の端で鳥取県には分布記録がないオオナミザトウムシだったからである。オオナミと同所的に生息するヒコナミザトウムシはオスの上唇で識別できる(オオナミ雄の上唇は左右にふくらみがある)が, 山根の写真にはこれらの違いが撮影されていた。さっそく 11 月 21 日に現地調査をした鶴崎は 107 個体を得たが, そのうちオオナミはたった 4 頭(オス)だった(オオナミ採取地点は駐車場の売店前のみ。全体ではヒコナミ 93 頭, サトウナミ 10 頭)。时期的にはザトウムシは産卵を終えているので採集は気が楽であった。採集個体の染色体数はオオナミ雄は 18, ヒコナミは 16 であった。これらは周辺個体群と同じ核型であった。

+++++

Kim, J.P. and H-M. Lee, 2016. A new species of the genus *Nandicius* Prozynski, 2016 (Araneae: Salticidae) from Korea. *Korean Arachnology*, 32(2): 1-5. 池田報告。メス 1 個体で新種記載されている本種 *Nandicius woongilensis* はむしろノコバハエトリグモ属 *Gedea* である。裂歯の記載を欠いているし, オスが記載されていない。

+++++

池田博明, 2017. ハモンヒメグモ は識別が難しい。池田報告。吉田哉は最初ハモンヒメグモをポーランド産の *simulans* と比べて同種としたが, 山形県立博物館報(2016)では新種 *Parasteatoda corrugatta* として新種記載している。その際に描かれた外雌器はそれまでの *simulans* 類似のオオヒメグモの外雌器よりも, カガヤヒメグモのそれに似ていた。腹部の形態もカガヤヒメグモに似ている。ただオスのパルプ形態はカガヤヒメグモのパルプよりもオオヒメグモのそれに似ている。リュウキュウヒメグモの雌雄の生殖器とはメス

では区別可能のようだ。

[コメント]ハモンヒメグモの外雌器の開口部の形態は見る角度によって異なってみえる。カグヤヒメグモの開口部はかなり特徴的だし、パルプの移精針の基部の太さが他種と異なるなど識別可能。つまりカグヤヒメグモは把握できる。しかし他種はリュウキュウヒメグモを白い卵囊で識別するのは確実だが、生殖器には変異もあるし、見る角度にも違って見えるため識別が難しい(谷川)。吉田哉氏は年末12月31日に60歳で亡くなられた。がんによる急逝に一同驚く(池田)。

+++++

新井浩司, 2016. Spider World . 池田報告。新井撮影・編集のクモ映像集(ワスレナグモは桑田隆生, ムツトゲイセキグモは佐山氏の撮影。自然観察会などで新井氏が講義で使用しているDVD。クモの擬態・捕食・造網・クモ食い・親子など。

[コメント]カバキコマチグモの母親食いの映像に字幕が付いていて、「1 齢幼体と母グモ」では幼体はまだ母親を捕食していない。「2 齢幼体。親食い」「3 齢分散」と続く。

+++++

谷川明男, 2017. 佐渡島クモ類調査. 谷川報告。佐渡島+新潟大学による動植物生息状況調査の一環。(1)クモ類調査で241種を記録。(2)重点調査対象種としてイソコモリグモ。局地的に発見された。遺伝子のハプロタイプでは柏崎と佐渡島は共通で特異な集団。

+++++